

12:28 律法学者の一人が来て、彼らが議論するのを聞いていたが、イエスが見事に答えられたのを見て、イエスに尋ねた。「すべての中で、どれが第一の戒めですか。」

12:29 イエスは答えられた。「第一の戒めはこれです。『聞け、イスラエルよ。主は私たちの神。主は唯一である。』

12:30 あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。』

12:31 第二の戒めはこれです。『あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい。』これらよりも重要な命令は、ほかにありません。」

12:32 律法学者はイエスに言った。「先生、そのとおりで。主は唯一であって、そのほかに主はいない、とあなたが言われたことは、まさにそのとおりで。」

12:33 そして、心を尽くし、知恵を尽くし、力を尽くして主を愛すること、また、隣人を自分自身のように愛することは、どんな全焼のさげ物やいけにえよりもはるかにすぐれています。」

12:34 イエスは、彼が賢く答えたのを見て言われた。「あなたは神の国から遠くない。」それから後は、だれもイエスにあえて尋ねる者はいなかった。

「神を…愛」することと「隣人を…愛する」こととは、どんな律法にも優っているという、聖書的倫理の本體がここにあります。パリサイ人や他の律法学者のように、自分の義や立場を守るために様々細かい規定を考えるのではなく、この律法学者は愛の大切さを心に据えていたようです。イエス様の教えを全く受け入れて、同意しました。



イエスが十字架で罪を負って死んでくださったという愛こそが、聖書の本質であり救いの真髄です。愛が分らない者には神は分らないのです。そして神が分らなくては、その神から与えられた律法も分りません。

そのよくな人々はクリスチャンとなつてからも、決まりごとを守ろうとして、形を優先させてしまします。そして、愛がどのよに働いているのかとうことに、思いが行かなくなつてしまいがちです。

自分や人の行いが正しいかどうかを判断する前に、まず自分は「心を尽くして愛して」いるかどうかを、真剣に考えてみましよう。言動が愛から出ているかどうか、常に気づくようによましよう。そのよくな者にしていただきましよう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたなどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

